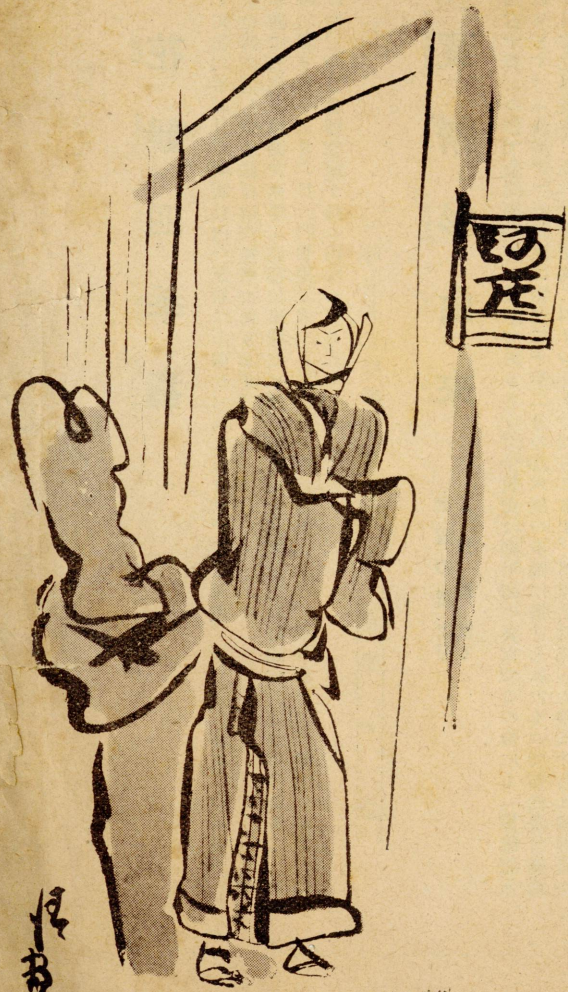


文樂座人形浄瑠璃



長
巻

十月本格興行

三 日 初 日

初日 二日 目 午後二時開演
三日 目より 午後三時開演

橋 ツ 四

文 樂 座

九月二十六日
全館開店

自慢の百貨
大軌百貨店
直営
大阪 上六

花競四季壽

景事として夙く文化六年二月の御霊社内の芝居に上演せられてゐます。春は萬歳、夏は蟹の汐波、秋は關寺小町娘、冬は鷺娘の四段返して優雅な所作模様であります。これは百四十年前に三代目鶴澤友次郎（通稱松屋清七）師の作曲で、其後三代目野澤吉兵衛師が改訂をし、五代目友次郎の時に至り毎年正月二日一門相集り式三七共に弾くのが吉例となり、現六代目まで約六十年間の慣例をひいたもので、今日鶴澤宗家十種の内にあげられてゐます。

三時より三時四十分まで 幕間 十分

南都夏辨杉由來 志賀の里より 二月堂まで

「良辨杉」は加古千賀女の作で豊澤團平師の節附であります。千賀女は團平師の妻女でこの他にも「靈驗記壺坂」の力作があります。「良辨杉」の初演は明治二十年二月の彦六座の手欄に掛けられたもので初代豊竹柳適太夫、三味線は三世豊澤廣作、後六世廣助師に創まつたものであります。其後歌舞伎へも移入せられ雅趣豊かな至難の名曲として傳へられて來たものです。只今では古靱太夫の極め附となつてゐますが、古靱太夫の初演は大正十年五月御霊文樂座で線は故人三世清六でありました。志賀の里の段、櫻の宮物狂の段、東大寺の段、二月堂の段から成立つてゐます。

三時五十分より六時二十分まで 幕間 十五分

御所櫻堀川夜討 辨慶上使の段

元文二年一月、竹本座に上場された文耕堂、三好松洛の合作になり、全五段ものでこの「辨慶上使」は第三段目であります。内容は義經の室の郷の君は平時忠の娘であるところから、頼朝は若し義經が平家と通じて居らぬなれば郷の君の首打つて渡せとの難題を嚴命します。郷の君を預る侍従太郎の館へ首切る役の上使は辨慶で子の爲には姫の首を打て頼朝の疑念を晴らすが得策と考へてきたが、郷の君の美しい御氣色、殊に御懐胎の様子を見てはそれゝ忍びず、當惑してゐるとき眼に付たは腰元しのぶであつた。しのぶはおさわの娘で郷の君に瓜二つの容貌に打喜んだ、おさわの迷懷から、辨慶はまだ書寫山の稚兒時代本陣の娘と月待ちの夜假寝の契を結んで懷妊した子供がしのぶと判つた。辨慶はお主の身代りに我子を一思ひに刺し、始めて遭ふた我子に敢ない別れをするといふ情懷つきぬ好箇の名作です。

六時三十五分より七時五十分まで 幕間 十分

紀國屋小春 紙屋治兵衛 心中天網島 河庄内の段

この淨瑠璃は文豪近松門左衛門が一代の傑作と謳はるゝ名作で、享保五年十月十五日の明け方、大阪網島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすぐさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので、以來心中物の白眉とされてゐます。天満の紙屋治兵衛は妻子ある身ながら會根崎の紀の國屋小春と深く契を結ぶ。兄粉屋孫右衛門は是を憂へて侍姿に身を扮し、河庄に到り小春に遭ひ、二人の仲を割かさうとし折から一ト目でもと小春に會ひに來た治兵衛にも意見を加へます。小春は女房のおさんの依頼の狀によつて義理に挟まれ、心ない愛想づかしをいひます。治兵衛の戀敵太兵衛が小春を身請けする噂を聞いておさんは衣類を質入してまで所要の金を融通し、治兵衛に顔を立てさせんとす。舅五左衛門はこの体を見ておさんを連れ歸ります。治兵衛は小春と網島大長寺へ往き情死を遂げるといふ義理と愛に涙を絞る世話物であります。

八時より十時まで 幕間 十分

釣女

能狂言「釣女」を始めて長眼に取入れたのは明治三年杵屋勘五郎で、花柳壽輔が振付中、勘五郎が死んだので一時埋れていたので、常磐津林中が小文字太夫と改名の際、常磐津となした更生文樂の爲にこれを淨曲化なしお目新しい物を上場いたします。内容は大名と太郎冠者が未だ定まる妻がない故、現福者と聞き及ぶ西の宮の惠比壽三郎殿に妻を申受けたいと祈念をこめる。夢にお告があつて釣竿を授り、各々妻を釣り上げてかつぎを取つて對面すると大名は美しい上臈、太郎冠者は世にも醜い醜女を授る。太郎冠者は上臈の手をとつて走り行く。

十時十分より十時四十五分まで 打出

康茂都陸平 振附

おんな

打出